

「日本の生命科学者の『たましい』の危機」
基礎研究と社会との架橋

2018年9月22日(土)

14:00~17:30 (13:30 開場)

京都大学東一条館 思修館ホール

(京都市左京区吉田中阿達町1 京都大学東一条館地下1階)

昨今、基礎研究が置かれている社会的状況は決して楽観できるものではありません。日本人科学者のノーベル賞受賞が取りざたされる中、基礎研究にかかる予算は減少傾向にあり、社会からは「社会に還元できる研究」に重きを置くべきであるとの声も聞かれます。

このような状況下、本来研究者の好奇心ベースで駆動されるべき基礎研究は、今後どのような方向性を持って進んでゆけば良いのでしょうか。

本ワークショップでは、3名の講演者をお招きし、科学・技術としての観点だけでなく、科学技術政策など、社会的な観点も含めて科学研究を取り巻く現状や問題点を捉え、今後の生命科学研究が目指していく方向性を、みなさんと議論したいと思います。

プログラム

【講演】

「転換期に科学と社会の関係を再考する」

有本建男 教授 (政策大学大学院 教授)

「科学とイノベーションの同時危機をどう乗り越えるか

-サイエンス駆動型イノベーションモデルの提唱-

山口栄一 教授 (京都大学総合生存学館 教授)

「“創発”を目指す“パスツール型”基礎科学研究について」

阪井康能 教授

(京都大学農学研究科 教授、公益財団法人 大隅基礎科学創成財団 理事)

【コーヒースタンド】

【話題提供】

「-日本の生命科学者の『たましい』の危機- アンケート調査結果」

奥 勇紀 (京都大学総合生存学館 博士一貫過程5年)

【全体質問】

【パネルディスカッション】



申込方法：右のQRコードより、参加登録をお願いいたします。

または、<https://goo.gl/forms/dbUL2PZkjX49cSqD3> よりお申し込み下さい。

参加費用：無料

使用言語：日本語